

電気技術史

The History of Electrical Engineering

マウイ会議特集号

Newsletter

平成8年2月29日発行

(社)電気学会 電気技術史技術委員会

CONTENTS

- 第1回マウイ会議に臨んで p.1
- S1の概要 両国の技術史活動 p.2
- S2の概要 ケーススタディ p.2
- S3の概要 共同研究の可能性 p.3
- 壇れ声のメインスピーカー p.4
- GC by TT p.5
- 大学における技術史関連教育 p.6
- 会議に参加して p.6
- IEEE側参加者 p.7
- 会議を終えて p.8



三井恒夫
電気技術史技術委員会委員長
東京電力(株)
最高顧問

第1回マウイ会議に臨んで

電気技術史技術委員会ではIEEEの歴史委員会ならびに歴史センターの方々と太平洋に浮かぶ常夏の島、ハワイ州マウイ島で「マウイ会議」を開催しました。本会議は、1994年5月に日本で行われたIEEE歴史センターのAspray所長と技術委員会委員(荒川、大来、鈴木)のインタビューがきっかけとなっています。この歴史センターは、1980年に組織され、IEEEの専属の機関で、約10名のスタッフを抱え、会員からの歴史的事項の問い合わせに答えるサービスや歴史研究をしています。同氏の他、IEEE歴史委員会の委員長であるWilliams教授を初め、次期委員長のPugh博士、スミソニアン博物館キュレータのFinn博士等の歴史に関する第一人者と集い、相互の活動を紹介しあいながら彼らから多くを学びました。IEEEでの技術史の研究は長く、歴史委員会は1963年、IEEE発足後まもなく発足しています。したがって、彼らは技術史、科学史に対し誠に真摯な態度で臨み、そして独特の歴史観を持っています。このことに深い感銘を受けました。また、彼らが、技術者であり歴史家である専門家として調査活動を進めているのに対し、日本では学者、企業の有志等が二足のわらじを履いて活動を行っている体制の違いを実感いたしました。

本会議では日本側から電気技術史研究活動の現状(田中委員)、電気技術の国産化(荒川委員)、技術史教育の現状(石井委員)についてご報告いたし

ました。IEEEからは歴史委員会と歴史センターの活動(Finn博士)、マイルストーンプログラム(Wright氏)などが紹介され、技術史調査の進め方では、人材の教育などに関し、活発な議論が行われました。

こうした会合の成果として当面、2年以内に第2回会議を開く、日米以外の国々へ参加をもとめる、マウイ会議での業績を広報するなどを申し合わせた「マウイ宣言」を採択しました。この宣言によって、IEEEと電気学会の電気技術史共同研究へ大きく前進したと確信しております。

本会議を契機にさらに両国のメンバーが力を合わせて技術史研究を進めて参りたいと思います。

最後に、IEEEと電気学会の両学会事務局による本会議の巧みな設営に敬意を表し、近い将来次期会議において再びお会いできることを楽しみにしております。



カジュアルウェアで臨む第1回マウイ会議
米国ハワイ州マウイ島ロイヤル・ラハイナ・リゾート
ホテルの1室にて

各セッションの概要



大来雄二
電気技術史技術委員会委員（前幹事）
（株）東芝
技術企画部企画担当部長

セッション1の概要 両国の技術史活動

12月7日（木）午前9時30分の定刻にマウイ会議は始まった。三井委員長とWilliams委員長から開会の挨拶があった後、IEEEと電気学会から両機関の活動概要を中心に幅広い報告を行い、意見を交換した。B.Finn氏（スミソニアン米国史博物館学芸員）は事前配布資料で、第二次大戦後の米国の状況を紹介した。すなわち、まず科学史が大学で、そして続いて技術史が技術者自身によって研究された様子を概説した。会議当日の発表に際しては、さらに19世紀末から始まった米国歴史研究の歩みについて、興味深い紹介があった。初期には科学の方法論が確立しているドイツから、留学生の派遣などによって歴史学について多くを学んだ。当初は政治史が研究対象となり、その後、経済とか文化の側面からの歴史研究が、そして科学技術史分野の研究が行われるようになった。

電気学会からは、田中昭昭委員（電気技術史研究の現状調査専門委員会委員長）から技術委員会・調査専門委員会の活動、他学会との交流などの紹介があった。また、中村利尊氏（（社）研究産業協会）からは協会の産業技術継承センターの活動について、また、鈴木浩幹事からは日本学術振興会149委員会で行われた第二次大戦後の日本での軍民転換の調査研究の紹介があった。



松本栄寿
電気技術史技術委員会委員
横河電機（株）
経営企画室技術館準備室長

セッション2の概要 ケーススタディ

セッション2には初日の昼食後、午後いっぱい時間があてられ、IEEE歴史センターのAspray所長のかるやかな司会で始まった。まず日本側から国産化

意見交換ではさまざまなことが話題になり、相互理解が進んだ。歴史を学ぶ技術者が社会史、文化史などに興味をもつ重要性も強調された。なぜ、米国は英国からではなくドイツから学問の方法論を学んだのかとの質問に対しては、英国のそれは中世的であるのに対し、ドイツは学術論理面でも大学院などの制度面でも優れていたからとの答があった。米国では大学院で技術史を学ぶ人たちの関心も多様で、技術史そのものが専門の人だけでなく、それを自分の専門の労働史とか女性史などに関連づけて学ぶ人も多い。また、MITとかカーネギーメロン大学などの工学主体の大学には小規模な人文系学部があり、その間の交流が活発なことが工学技術にとって好結果をもたらしているとの見方も紹介された。日本社会の閉鎖性が技術史研究のやりにくさに関係しているのではないかと意見もあった。また、技術の担い手が個人からチームとか大規模組織に移行する傾向の中で、技術資料一つにしても誰がどのように残すべきなのかがより難しい問題になっているとの指摘がなされた。

最後に、会議の雰囲気について触れよう。会議室の名前はラナイ、ハワイ諸島の島の名前を付けたもので、ホテルの海岸から見える2つの島の左側である。もう一つの島はモロカイ、第二日目の会議が行われた部屋の名前になっている。会議室の口の字の会議机には熱帯植物の花がおかれ、テーブルクロスは白とあざやかな対比をなしている。座席は、三井、Williams両委員長には正面中央にお座りいただいたが、それ以外は電気学会とIEEEがそれぞれグループを作る形とはせず、自由に座ってもらった。服装をアロハ、もしくはカジュアルとしたこともあって、和やかで建設的な雰囲気の中で会議は進行し、屋前に無事セッション1が終了した。

委員会の活動状況が荒川委員から、つぎに東京工業大学の技術史教育の現状が石井委員から発表された。アメリカ側からはAspray所長がIEEEの歴史センターの最近の活動が紹介され、コメンテータとしては日本側に対してWilliams教授、アメリカ側に対して松本委員と前島委員があたった。配布された文書は以下のとおりである。

Arakawa:Technology Transfer

--Investigation Committee on the Domestic
Innovation History of Electrical Technology
('94年発足電気技術国産化委員会の目的と状況)

Ishii: The teaching history of technology at
Tokyo Institute of Technology.

(東工大の技術史教育、歴史・工学系教育者など)

Aspray: Activities of the IEEE Center for the
History of Electrical Engineering.

(IEEEの歴史センターの活動状況、プログラム)

Matsumoto: History Column—Journal of IEEJ

(電気学会誌連載の歴史・文書館訪問、紹介文)

Maejima: Some typical dilemma of corporation
with Historian and Engineers.

(歴史家と技術者の立場、考えの差について)

Aspray所長はIEEE歴史センターの活動を次のよう
に紹介した。

- (1)対象は会員と学生、歴史家から一般人まで。
- (2)専門の歴史家、アーキビストを雇用している。
- (3)古文書の収集、研究ガイド、研究の援助などで各
部会と協力している。7つのリエゾンがある。
- (4)歴史は技術者と一般人に電気技術の成果を認識、
技術の発展の背景、技術発展を解析するのに有効
である。
- (5)次世代を育てるため、研究員制度、奨励金、研究
素材の準備などを支援している。
- (6)歴史研究、アーカイブス、一般への奉仕(展示や
講義)が三本柱である。
- (7)アーカイブスは運営せず他の計画の助言をする。
- (8)19世紀からの電気技術史をまとめる計画が進行
している。
- (9)マイルストーンプログラムは楽しいプロジェクトで
ある。全世界は平等に扱われる。



鈴木浩

電気技術史技術委員会委員(前幹事)

三菱電機(株)

電力システムエンジニアリングセンター長

セッション3の概要 共同研究の可能性

セッション3は、マウイ会議の第2日目1995年12
月8日(金)【ハワイ時間】7:30~11:50まで行
われ、将来の共同作業に関して議論された。この
セッションは朝食会をかねて、ロイヤル・ラハイ
ナ・リゾート(米国ハワイ州マウイ島)の第1日目
の隣の部屋である会議室モロカイにて開かれた。会
議の休憩をかねて、途中、参加者全員で記念撮影も
行われた。

次のような議論が参加者間で交わされた。

- (1)インタビューの際、対象者を知っている人を選
ぶ日本のやりかたはアメリカと違う。文化の差
か。
- (2)技術移転の発表は事実、解析など良い内容であ
る。技術段階の解析のステージモデルについて、
アメリカでもモデルを議論した時期があった。特
定モデルでなく自分自身のものを作り上げるのが
よい。
- (3)東工大の技術史の最初の先生はどこで学んだの
か。科学技術系の人が歴史家になったのか。ア
メリカの技術史教育の経過など。
- (4)日本語WPIは初めのコンセプトが成功した。失敗
の歴史は重要だが情報が得がたい。RCAの歴史や
ビデオディスク、DDTの例もある。歴史家は
(how to do)、技術者は(what to do)を知って
いる。
- (5)IEEEには歴史センターがあり素晴らしい。



左からPugh博士, Aspray博士, Williams教授

1. 討議内容

司会 鈴木幹事

電気学会及びIEEE間の技術史研究に関する将来の
共同作業について、米国側からは次期歴史委員会委
員長Pugh氏が、日本側からは三井委員長がそれぞれ
基調講演を行った。それぞれが、今回の両組織の活
動状況をふまえた上での積極的かつ具体的な提案内
容を含むものであった。Pugh氏は、技術史研究のた
めの資料の準備、共同調査の可能性、PR活動、情報
交換に関して提案を行い、三井委員長より、資料保
存方法、技術移転、聞き取り調査手法、技術史教
育、技術史の体系化に関する情報交換と協力の可能
性について提案があった。

その後、これに対して大来幹事、Williams氏よ
り、互いの講演についてコメントがあった。大来氏
は、歴史を将来の時点に立って逆に現在を振り返っ

てみているような視点が大切であると主張した。Williams氏は、計算機技術誌Annalsへの日本からの投稿など個々の協力関係の積み上げが大切であると述べられた。

その後、各参加者からもコメントがあった。この中では、

- (1)電気技術史研究会の英文アブストラクトや電気技術史ニュースレター英語版等の日本からの情報発信について
- (2)歴史家養成のための奨学金制度や交換留学制度について
- (3)博物館や展示会への協力について
- (4)英国、ドイツ等の他の電気学会との電気技術史研究についての交流について
- (5)学会図書室の運営等について
- (6)IEEEが顕彰しているマイルストーンプログラム（詳細は電気学会誌1995年9月号トピックス参照）への日本からの貢献について
- (7)電気技術史に関係する史料保存とアーカイブ（文書館）について
- (8)聞き取り調査（オーラル・ヒストリー）の手法について
- (9)調査専門委員会へのIEEEメンバーの参加可能性について

等の話題が取り上げられた。

2. マウイ宣言

また、両学会の技術史研究活動推進についての「マウイ宣言」案についても議論され、以下の項目を確認した。

- (1)日米電気技術史会合については、今後も「マウイ会議」という名称とする。次回については、2年以内にIEEEが主催して開催する。
- (2)本会議は国際的な会議とし、今後両学会以外の内外諸機関にも参加を求める。
- (3)協力項目として提案されていた事項については、幹事の間で整理、修正を行う。
- (4)本会議の結果を広く広報する。電気学会誌、新聞、Annalsへの発表など。
- (5)宣言の取扱い（オーソライズ）については、双方の学会の事情に応じて幹事の間で調整後、確認し両委員長が署名する。

3. 閉会挨拶

関係者を代表して、米国側からはWilliams氏より、日本側からは、三井委員長（途中退席のため荒川委員代読）より閉会の挨拶があり、マウイ会議の日程を終了した。

日本側メインスピーカー



田中 中国昭
電気技術史技術委員会委員
千葉大学工学部
電気電子工学科教授

囃れ声のメインスピーカー

Dr.FinnがFirst Position Paperを担当してくれることになったと、Dr.Asprayからの連絡が届き、出発が近づいてから予稿も送られてきた。予想していたように、アメリカの「電気技術史研究」の50年を裏証的に真正面から取り扱った内容であった。1943年のM.MacLarenの著作からS.Smulyanの"Selling Radio"(1994)までの主要出版物19冊の分析に目を通したとき、この中に流れている技術者への強力なメッセージを感じた。

この会議は、公式には電気技術史に関する日米の情報交換だが、我々の本音は本格的歴史家を擁するIEEEの胸を借りて、短期的には多くの手法を、長期

的には専門家と歴史家の融合領域の形成とその活動形態を学び、最終的には電気技術史という個別技術史の構築を目指そうとしているのだから、このメッセージは嬉しかった。

メインスピーカーを引き受けることになったとき、学会の沿革と、日本の電気技術の先駆者たちの歴史的視点に立った活動をできるだけ総体として伝えるべきだと定めた。しかし限られた時間の中で、そのような意図が伝えられるだろうか。電気学会の100周年までの節目の記念号や電気学の泰斗の記念記事、歴史的な特集号のタイトルを挙げて学会史の断片をまとめ始めたが、日本の電気技術史研究を総体として示すことなど無謀としか思えなくなり、憂鬱な準備を進めた。

1. 電気学会の沿革：

- (1)1888年創立について
- (2)創立記念の年における歴史的活動と人物、出版物

2. 電気学会雑誌における電気技術史論文と記事

3. 電気技術史技術委員会の創設と活動

の3節からなる5頁のShort Paperをまとめたが、これだけでは意図は伝わりそうにない。少なくとも「現状調査」でまとめた技術報告「電気技術史研究活動の沿革と現状」の中の主要史書を紹介する必要があると思われた。きびしい時間的制約の中で、題名だけの、それも不十分な訳になることを覚悟して、「Principal Bibliography of Electrical Engineering in Japan」という付録を付けることにした。

当日は、話のはじめに予言者ぶって「・・・Maui Meeting which shall be historic in the near future.」と気取ってみたが、出発当日の医師の処方も、キヨスクののど飴も効なく、とぎれとぎれの囁



荒川文生
電気技術史技術委員会委員
電源開発(株)
工務部参事役

GC by TT

マウイ島で電気技術史に関する日米会議—そのセッション2でメインスピーカーを東工大・石井先生とともにお引受けすることになって、心臓から毛が抜け落ちた。この分野の諸先達の前で、何が報告できるのか。しかも、我が方の団長(三井委員長)は、かつて電気学会会長として「海外に発信を」と演説された方である。依頼の趣旨は、「国産化」の調査専門委員会をお預かりしていることなのであるから、そのなかのテーマのひとつを基礎として、「技術移転による国際貢献(Global Contribution by Technology Transfer)」を提示し、多少のお役に立てばと考え、資料を用意した。

結果について、「事実・解析など良い内容」との評価を頂けたのは幸いであるが、解析の手法としての「モデル」について、期待以上の討論があったのは誠にあり難く、また、さすがに諸先達との会合の価値は高いものと感服した次第である。その内容は、報告書のなかで反映させて頂くが、モデルによる分析が、決めつけや言葉の遊びに堕することのないようにとの忠告の意味は深い。実は、経済モデルやエネルギーモデルの分野でも、同様の批判が聞かれるのである。つまり、モデルにのめり込んでしまうと、例えばモデルの作り方が関心の的となり、本来、モデルはそれを使って得られる分析結果に意味があることが忘れられてしまうのである。

歴史研究を未来指向型にするうえで、国際的な技術移転の分析に意義ありとする見解が支持されたこ

れ声となり、迫力はゼロに収束した。中休みにProf.J.CoopersmithやDr.F.Nebekerらの若手研究者から、そのBibliographyの50,000頁におよぶ主要史書への驚きと喚起された興味の声聞き、いくらか意図が通じたことに安堵した。

この会議の素拙の段階から、どれだけ米国側を本気にさせるかが成否を分けると考えていたが、第1回で、電気技術史研究に関する交流の土俵と原型が形成され、お互いに次回への強い意欲を確認し合った。これによって、この分野に関心を持つ技術者の大きな活躍の場がみえてきた。関係者の責任も重くなったとらえたい。

とも、大いに意を強くするところとなったが、現状で、我々の研究・調査には、主としてふたつの課題が残っている。ひとつは、「国産化」の過程分析における導入元としての海外の状況が十分に把握されていないことである。ふたつには、技術移転が日本の国際貢献推進のテーマであるとするには、まだ、論理の飛躍が大きいようで、この点に関する議論は、余り得られなかった。これらの課題に、早急には対処できかねるが、じっくりと腰を落として取り組んで行きたい。

もうひとつ、聞き取り調査について大いに議論して頂いたのも、あり難くまた興味深かった。気心の知れた同志で聞き取りを進めるかどうかは、文化の違いと言う見方もあるが、どんな内容を聞き取るか、主観性と客観性との問題でもあろう。「失敗に学ぶ」ことの難しさ(例えば事故の公表)にも文化の差があるような気がしていたが、これには、当事者と評論家の差こそあれ、日米の文化の差があると見るのは当たらないと感じた。

いずれにしろ、海外への発信には、情報の受け手をよく理解すべきであり、日米会議は、この意味でも極めて有意義であったと言えよう。



Coopersmith氏より寄贈本を手渡される三井委員長



石井彰三
電気技術史技術委員会委員
東京工業大学
電気電子工学科教授

日本におけるケーススタディ 大学における技術史関連教育

大学における学部カリキュラムの改革の流れの中で、理工系大学における技術史をはじめとした人文社会科目の教育について様々な試みが始まっている。電気学会に設けられた電気技術史技術委員会の活動は、電気電子工学の専門だけに閉じこもらずに、別な角度から電気技術をとらえようとするもので、大学教育にその成果を反映していくことも、重要な使命であろう。今回、マウイ会合において日本における技術史教育の現状の一例として、東京工大の教育を報告した。

東京工大では技術史に関する教官ポストがわが国で最初に設置され、従来から人文社会の講義の充実にも力を入れてきている。最近の新しい動きとして、人文社会関係の講義のなかに、各学科、専攻の先生も協力して行う「総合科目」をおき、学部と大学院の学生が受講できることになった。この科目の目的は、理工学の専門的な内容にとらわれず、社会や人間との関わり、他分野との関連などを意識しつつ、総合的なもののとらえ方や広い視野をもつことを学ぶことにある。米国においても理工系の大学では専門科目の講義の時間が多く、技術史等の人文社会関

係の講義をとる学生数は多いとはいえず、また、教授の間でもこのような講義に対しての理解は低いようである。技術史のとらえ方として、理工系の学生は技術と社会との関わりに関心をもち、文系の学生は技術や科学そのものの発展過程に関心をもちとの発言があった。わが国の場合をどうであろうか。東京工大の場合、「総合科目」の位置づけは前者の考え方に近い。一方、技術そのものの発展の流れについては、それぞれ専門の講義のなかで、説明が当然行われる。

理工系大学で技術史をなぜ学ぶのか、この問題は技術史を担当する先生よりも、それぞれの専門の先生方が真剣に考える必要があろう。古ぼけた旧型の機器や計測器を跡形もなく廃棄する前に、それらが必死で語りかけようとしている内容を理解できるようになれないだろうか。技術は知識と経験の積み重ねなしには、できあがらない。技術の過去の流れを調べ、実際のモノに触れることは、懐古趣味ではない。製品や技術は、その当時の技術水準、社会的背景、人間の価値観や倫理観まで広い広がりをもった状況から成り立っている。このような様々ななかかわり合いを、理解できる研究者、技術者を育てていくべきではないだろうか。わが国の産業技術が節目にかかっている現在、違った観点から物事を眺めることができる人達を一人でも多く育てる場こそ、大学であると信じている。さらに、日本の産業が世界の動きに、どのように巻き込まれていくのか、きわめて微妙な時期において、わが国の技術者が技術史に関心をもち諸外国の人達と交流を深めることは、心強いことである。

会議に参加して



高橋雄造
電気技術史技術委員会委員
IEEE歴史委員会委員
東京農工大学工学部
電子情報工学科教授

このような会議を開催することは、20年ほど前に世界中をめくりつつ、日本での電気技術史研究活動の開始を模索していた頃から、構想していましたが、このたびこれが実現して、まことに感無量です。参加者のうち、日米両国の代表（日本の電気技術史委員会と、米国のIEEEのHistory Committee両方のメンバー）であるのは小生だけですから、喜びもひとしおでした。大来さん、鈴木さん、荒川さん、まことにご苦労さまでした。

会議の内容紹介は他の方々におまかせして、3つだけコメントします。

- (1)電気技術史技術委員会副委員長である末松先生の御参加が実現しなかったのは、残念です。
- (2)早期に、公開のマウイ会議報告会を国内で開催すべきでしょう。期待している向きも多いはずです。新聞社と共催するとかを検討してもいいかもしれません。
- (3)会議では、荒川さんが薬師寺氏の「ステージモデル」を紹介して、ホットなディスカッションになりました。国際的に注目されたこのステージモデルについて、荒川さんから電気技術史研究会で発表していただきたいと思います。

IEEE側参加者



Dr. William Aspray
IEEE歴史センター
所長



Dr. Frederick Nebeker
歴史家
(歴史センター/ラトガース大学)



Dr. Bernard Finn
スミソニアン国立博物館
キュレーター



Dr. Emerson Pugh
次期歴史委員会委員長 (元IEEE会長)
IBMワトソン研究所



Dr. Jonathan Coopersmith
テキサスA&M大学歴史学科教授
日本のファクシミリ普及史を編纂



Prof. Michael Williams
歴史委員会委員長
カルガリー大学



Mr. Charles Wright
歴史委員会委員
マイルストーンプログラム担当
(元コロラド電力)

IEEE歴史センターは、インターネットの
ホームページを持っています。

http://www.ieee.org/history_center

IEEE Electrical Engineering Milestones (現在までのIEEEのマイルストーン)

- (1) Westinghouse "Atom Smasher," [1937 Forest Hills, PA] (May 1985)
- (2) Landing of the Transatlantic Cable, [1886 Heart's Content, Newfoundland] (June 1985)
- (3) Reception of Transatlantic Radio Signals, 1901 [Signal Hill, Newfoundland] (October 1985)
- (4) First Central Station in South Carolina, 1982 [Charleston, SC] (July 1986)
- (5) One-Way Police Radio Communication, 1928 [Detroit, MI] (May 1987)
- (6) Two-Way Police Radio Communication, 1933 [Bayonne, NJ] (May 1987)
- (7) FM Police Radio Communication, 1940 [Hartford, CT] (June 1987)
- (8) Electronic Numerical Integrator and Computer, 1946 [Philadelphia, PA] (September 1987)
- (9) Demonstration of Practical Telegraphy, 1838 [Morristown, NJ] (May 1988)
- (10) Ames Hydroelectric Generating Plant, 1981 [Aes, CO] (July 1988)
- (11) Manufacture of Transistors, 1951 [Allentown, PA] (April 1989)
- (12) Benjamin Franklin's Work in London, 1757-1775 [London, England] (1990)
- (13) Atanasoff-Berry Computer, 1939 [Ames, IA] (April 1990)
- (14) Adams Hydroelectric Generating Plant, 1895 [Niagara Falls, NY] (June 1990)
- (15) Transcontinental Telegraph, 1861 [Fort Laramie, WY] (August 1990)
- (16) MIT Radiation Laboratory, 1940-1945 [Cambridge, MA] (October 1990)
- (17) Shoshone Transmission Line, 1909 [Georgetown, CO] (October 1990)
- (18) Richmond Union Passenger Railway, 1888 [Richmond, VA] (February 1992)
- (19) Alexanderson Radio Alternator, 1904 [Schenectady, NY] (February 1992)
- (20) Alouette-ISIS Satellite Program, 1962 [Ottawa, Ontario] (May 1993)
- (21) Poulsen-Arc Radio Transmitter, 1902 [Lyngby, Denmark] (May 1994)
- (22) Westinghouse Radio Station KDKA, 1920 [Pittsburgh, PA] (June 1994)
- (23) Directive Short Wave Antenna, 1924 [Miyagi, Japan] (June 1995)



前島正裕
電気技術史技術委員会幹事補
国立科学博物館
理工学研究部

青い空、青い海、本当に楽園のような素晴らしい所で会議が行われました。Finnさんをはじめ、AsprayさんやCoopersmithさんなど、我々日本側にも馴染みの方が多く、大変和やかな会議でした。また初対面ながらWilliamsさん、PughさんWrightさんやNebekerさんの大変フレンドリーなまた熱心な態度が印象的でした。電気技術の歴史を研究する必要性、それを日米で分かち合える喜び、そしてそれをバックアップし発展させようとする意気込みを感じました。今後の展開を期待させる会議でした。



田中邦典
電源開発(株)
工務部水力電気課

我々日本の電気技術者にとっては、今回マウイミーティングが開催されたことで、電気技術の歴史という新たな分野での組織的な国際協力が始まったと言えるのではないだろうか。技術者は、歴史を学ぶことによってその役割をより明確に意識することができるようになり、更に今後の方向づけの参考とするわけだが、歴史をより広い視点から見つめられるようになることは大変意義深いことである。このような協力関係が今後ますます広がっていくことは、技術者にとって非常に期待すべきことであろう。



渡辺和也
電気技術史技術委員会幹事補
東京電力(株)
史料調査チーム主任

マウイ会議では主に会合の運営支援をしておりましたが、この会議に参加できたことは、貴重な体験でした。技術史研究活動をさらに広げること(特に東京以外の地域で)や多くの方々と協力すること等、技術委員会には宿題があるのですが、少しでもこの宿題が片づくこと、そして次回のマウイ会議により多くの方々から協力と期待をいただける集いとなることを切に願っております。



中村利尊
(社)研究産業協会
産業技術継承センター
調査課長

今回の「マウイ会議」は、産業技術継承活動の事務局をつとめる私にとって、非常に有意義な会議となりました。エポックメイキングな技術を開発された方々への聞き取り調査、国内博物館ガイドのインターネット化、それぞれに関して「技術の歴史は一般に成功の歴史であり、勝者の歴史である。もし、失敗の歴史があったら歴史の幅はずっと広がる・・・」、「インターネット化にあたり、とりあえず館名、開館時間等が英文化されていれば役に立つ・・・」など貴重なご意見をいただき、とても参考になりました。本会議が今後とも益々発展されんことを心からお祈り申し上げます。



マウイ会議初日の夜に開催されたパーティ

電気技術史 第8号

発行者 (社)電気学会
電気技術史技術委員会
委員長 三井恒夫
副委員長 末松安晴
編集人 荻宏美
高橋雄造
前島正裕
八代健一郎
渡辺和也

〒100 千代田区有楽町1-12-1

発行日 平成8年2月29日

禁無断転載